

小林 茂教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 奥 地 正

小林 茂先生のご退職にさいして、『立命館経済学』において退任記念論文集を特集し、ここに刊行することになりました。

小林先生は1995年3月31日をもって、健康上の理由から依願退職されました。先生は1972年4月に、立命館大学経済学部に助教授として着任されました。それ以来今日まで23年の長きにわたって、立命館大学および経済学部の発展のために尽力してこられました。この間の先生の多大のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ここにささやかながら記念論文集を編集・刊行し、先生に贈呈することになりました。

小林先生は1931年に京都市でお生まれになり、京都府立第一中学校（旧制）、同鴨沂高等学校（新制）などを経て、1951年に京都学芸大学教育学部に入学されました。1955年に同大学英语英文学科を卒業され、京都府立洛北高等学校教諭（この間、60年9月から半年間、フルブライト奨学資金によりテキサス大学大学院に留学）、京都教育大学付属高等学校教諭などを経て、72年に立命館大学助教授に就任されました。以来23年、1977年に教授に昇任されましたが、この間一貫して英語の担当者として学部学生の教育に当たられる一方、日本アメリカ文学研究会、京都アメリカ文学研究会、京都教育大学英语教育研究会、日系文化研究会などに所属して、英語・アメリカ文学のご研究に努めてこられました。

小林先生のご研究の一端を紹介すれば、先生は先生に固有の明確な美的・社会的問題意識の下に、アーネスト・ヘミングウェイ、リチャード・ライト、バーナード・マラマッド、カート・ボネガットなど、20世紀アメリカを代表する小説家たちの諸作品を精読・含味され、上記研究会での研究発表や、K. ボネガットの短編数点の翻訳（未刊）、同じくボネガットがすでに1950年代はじめから、科学技術の発展とうらはらな人間精神の荒廃、環境破壊、人口爆発、核の脅威や戦争など人類にさし迫った危険を、作家の鋭い感覚でいち早く察知し警鐘を鳴らしていた25の短編に関する試論「カナリアの啼き声」（『外国文学研究』第39号、1977年）にまとめられました。また、先生は歴史学者小江慶雄氏との共訳で『謎の古代文明』、『海底の文化遺産』、『シルクロード探検秘話』などの大部な翻訳を紀伊国屋書店、時事通信社から、飛田就一先生ほかとの共訳でJ. Hartnack『人権・正義・国家』の訳書を富士書店から出版されていることを記しておかなければなりません。

他方で先生は英語の言語そのものに強い関心をもたれ、いわゆる4技能を学生たちに円満に習得させることを早くから目標にしておられました。この面でのお仕事についてあげれば、すでに1961年に英語と日本語の母音および子音の比較研究を手掛けられ、69年には高名な言語学者である大塚高信氏との共著で『英会話演習（三巻）』を研究社から出版されています。また、先生は『ニューホライズン英和辞典』（東京書籍、1980年）の執筆者のお一人でもありました。

この間、先生は学内では、外国語科連絡協議会委員長、経済学部主事、入試総主査などの重責

を担われ、それぞれの任務を果たしてこられました。とくに、外国語教育の改善には、大きな役割を果たされました。

今日、21世紀を目前にして、国際化・情報化・人間化やグローバル化・ボーダーレス化などがいわれ、本学が立命館アジア太平洋大学の創設を目指している中で、小林先生をお送りすることは本学として、また本学部として誠に惜しいかぎりではありますが、これもやむを得ないことかと思われまふ。私ども経済学部教授会は、先生の長年におよぶご功績に対して名誉教授の称号をお贈りすることによって、私どもの微意を表したいと考えました。

今後とも一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げますとともに、先生の今後のご健勝と一層のご活躍を心から祈念して、送別の言葉とさせていただきます。

1996年2月